



TITLE:

<図書紹介>荻原弘明, マンナン・ヤーザウィン第五部・第六部, 鹿児島大学文科報告第十号史学篇第七集, 1961 年同第十二号第九集, 1963 年

AUTHOR(S):

大野, 徹

CITATION:

大野, 徹. <図書紹介>荻原弘明, マンナン・ヤーザウィン第五部・第六部, 鹿児島大学文科報告第十号史学篇第七集, 1961 年同第十二号第九集, 1963 年. 東南アジア研究 1964, 1(3): 100-100

ISSUE DATE:

1964

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54831>

RIGHT:

か、もう少し簡単にみればよかったのであるまいか。

政治的統計、ことに投票状況などに就ては統計があるので、これも示して頂きたかったし、宗教に就ても項目はあるが統計が示されていない。例えば印度人と言ってもヒンズーとは限らないので、こう云う点の統計も多少古くとも示しておいて頂くと参考になる。

この種の書物は一般にすぐ古くなる憾みがある。1963年出版のかなり統計を使った OoiJin-BeeのLand, People and Economy of Malaya など本書に参照することは時間的に無理であったと思うが、今後も煩をいとわず補正して頂くことをお願いしておきたい。

(棚瀬襄爾)

荻原弘明：マンナン・ヤーザウィン第五部・第六部、鹿児島大学文科報告第十号史学篇第七集、1961年同第十二号第九集、1963年。

mnan māha jazāwin dōji: は、1920年刊の Kounbaunshē? māha jazāwin dōji: と共に、原語によって書かれたビルマ年代記の中では、最もまとまったものであり、ビルマ史研究家にとって、必読の書と言う事ができる。

この年代記は、コンバウン王朝の第七代国王バジードの命によって、1829年に、僧侶、婆羅門、王宮高官等の手によって、編纂されたものであるが、内容の大半は、十八世紀初期に、u:kala:によって書かれた māha jazāwin ji: に依拠しているといわれる。

「南方史研究Ⅲ」の中で、既に、訳者によって指摘されているように、従来、この年代記については、英訳及び仏訳が、知られていた。しかし、いずれも、完訳ではない。

今回の荻原氏の労作は、本邦初訳であるばかりでなく、英仏両訳本に欠けている部分をも、補おうとする意欲が認められ、その全訳が期待される。

鹿大文報告十の七と、十二の九に発表された第五部及び第六部は、原典第一巻の146章から150章までと、151章から161章までとに、夫々相当する部分の邦訳である。ビルマ史の上では、バガン王朝の中期から末期まで、ピンヤ・サガイン両(シャン族)王朝、インワ王朝、ハンタワディ(モン族)王朝の一部等に、該当する。訳文には、前記英、仏両訳本との対照結果に基づき詳細な註、及び元史、元史綱目、元史征綱録等中国側の文献による対照も行なわれていて、読者の理

解を、便ならしめている。

ここで、訳文について、若干の批判を呈したい。訳者は、東洋史、特に、ビルマ史の専門家として、深い知識を有しておられるが、訳文を、原文と対照してみると、全体に恣意的な訳が多いという印象をうける。殊に、訳語が不統一で、甚だしい場合には、原文の一単語に対して、四つの訳語が用いられている場合さえある。例えば、mein:maŋe に対する訳語として、〈女の子〉、〈娘〉、〈若い女〉、〈若い侍女〉の四形の使用が、認められる。

いかなる翻訳にも、つきまとう現象であるが、原語の忠実な訳だけでは、訳語としての流暢さに欠ける場合が、少なくない。従って、原文と訳文との間に、或る程度、訳者の主観的操作が加えられる事は、止むを得まい。しかしながら、「マンナン・ヤーザウィン」が、外国文学の翻訳ではなく、歴史的資料の翻訳を意図するものである以上、そのような恣意は、排除されるべきでは、なかろうか? 訳語や、訳文の表現形式は、常に、原文原語との間に、一定の対応関係を、保っているようにする事が、望ましい。

とはいえ、今回の翻訳は、誠に画期的な労作であり、ビルマに関心をもつ一人として、その早急な完訳を切望したい。

(大野 徹)

Lehman, F.K.: The Structure of Chin Society. The University of Illinois Press, Urbana. 1963. pp. xx+244

本書はイリノイ大学の research associate である著者が1957年2月から1958年8月にわたり、ビルマ西部の丘陵地帯でおこなったチン族の文化人類学的調査にもとづいて書いたものである。チン族は西ビルマからインドのアッサム州、東パキスタンのチッタゴン丘陵地帯にかけて分布する山地民であるが、本書ではビルマ領のチン族に研究の焦点が当てられている。

内容は 1 Habitat, Identity, and History of the Chin, 2 Chin Land Use and Agriculture, 3 Land Tenure and Inheritance, 4 Southern Chin Social Systems, 5 Northern Chin Social Systems, 6 Aspects of Northern Chin Economics, 7 Some Conceptual Structures in Chin Religion, 8 Chin Attitudes and Psychological Orientations, 9 Recent Social and Cultural